述語の取り立てについて
―「だけ」と{man}、{ppwun}を中心に―

趙　愛淑

キーワード：とりたて、等価、排他的な限定、述語の取り立て、対比・関係づけ

0．はじめに

日韓両言語は他の言語には見られない類似性があると言われている。特に、従来日本語の副助詞、係助詞とされてきた語類と韓国語の特殊助詞[1]とされる語類は、その接続の様相、文法機能、意味などの上で、共通するところが多い。本稿は、副助詞として扱われてきた「だけ」の持つ＜とりたて＞機能に着目し、これに対応する韓国語との対照を目的とする。

＜とりたて＞という観点からいうと、「だけ」に対応する韓国語は{man}[2]、{ppwun}がある。これらの主たる機能は前接要素、或いは文にある種の意味を加えることである。

(1)　a. 太郎だけが京都へ行く。
　　b. 철수{ 만/* 뿐}이 교토에 간다。《太郎だけが京都へ行く》
(2)　a. 太郎が京都へ行くだけだ。
　　b. 철수가 교토에 갈 {* 만/ 뿐}이다.《太郎が京都へ行くだけだ》[3]
(3)　a. 押入から布団を引き出しただけだ。
　　b. 장농에서 이불을 꺼내기{ 만/* 뿐} 했다. 《*押入から布団を引きだけ出した》
　　c. 장농에서 이불을 꺼냈을 {* 만/ 뿐}이다. 《押入から布団を引き出しただけだ》

例(1)～(3)から、名詞と格助詞の間の「だけ」に対応するのは{man}、述語に後接する「だけ」に対応するのは{man}、{ppwun}の両方であることが分かる。つまり、「だけ」に対応する韓国語はその構文的な位置によって二つの異なる形態が現れる。

「だけ」は構文的に、文の様々な構成要素に後接できるという特徴と文中でそれが削除されても文が成立するという特徴を持つ。{man}と{ppwun}も「だけ」と同様の特徴を持つが、{ppwun}は判定詞[4]{-ita(だ)}を伴い、主に文末に現れるという構文的な制限がある。従って、「だけ」に対応する韓国語が二つの形態に分けられるのは、意味的な相違でなく、{man}・{ppwun}の両形態の持つ構文的な制約によるものであると考えられる。

意味的に、例(1)、(2)は「太郎が京都へ行く」という文の伝えるコトガラに対する意味と「太郎以外の人は京都へ行かない」という実際に文中には示されない意味を同時に含んでいる。「だ

け」と{man}、{ppwun}は、「京都へ行く人がいる」ことを前提として、取り立てられる要素「太郎」とおよび暗示される要素「太郎以外」を対比させている。対比・関係づけのもとで、「だけ」によって取り立てる要素は、同類の他の要素のなかの対比的要素を排除することによって、その唯一性が示される排他的な限定の意味を持つ。つまり、意味的な特徴からみた場合、「だけ」と{man}、{ppwun}は等価(equivalence)である。

ここでは、構文的な特徴に焦点をあてて、「だけ」と{man}、{ppwun}の分布が重なる述語との関わりを取りあげ、三つの形態が持つ構文的・意味的な特徴について対照したい。なお、これらの形態の持つ語用論的な側面から見た「意味」、又、各々の形態が持つ個別的な機能については稿を改めて考察したい。

1. ＜とりたて＞の先行研究

従来、「だけ」について、山田(1908)は、「或る用言の意義に関係を有する語に附属して遥かに下なる用言の意義を修飾するもの」(1943:439)とし、副助詞として定義した。このカテゴリーについて、寺村(1991)は「文中でいろいろな構成要素をきわだたせ、何らかの対比的効果をもたらすこと」(p13)として、「取り立て助詞」と捉え、沼田(1986a)は「文中の様々な要素（自者）をとりたてて、これに対する他の要素（他者）との論理的な関係を示す語である」(p108)と定義される「とりたて詞」とした。また、寺村は ＜とりたて＞による「対比的効果」は「暗示」されるもので、文中に明示されていないが、意識されているものとしている。つまり、＜とりたて＞とは、なにか一定の表現手段をもちいて、文を構成するある要素を焦点化して、前提とされる他の同類の要素と対比することによって、文中に明示される要素と暗示される要素とを関係づける働きをする。

韓国語の{man}は、特殊助詞などとして扱われ、文法形態素として単語と単語の間の文法的な関係や機能を形式的に表示する助詞に対して、「前接する要素に意味を加えるもの」[5]と定義づけられている。つまり、韓国語の文法体系の中で助詞は、格を表すのか、意味を加えるのかによって二分類されていることが分かる。

一方、{ppwun}に関しては、構文的に体言に後接する場合は、崔鉉培(1959)は towumthossi(도움토씨)、徐正洙(1994)は限定詞とする。用言の連体形（冠形形）[6]に後接する場合は、両者とも形式名詞（依存名詞）として分けている[7]。しかし、分布は異なるものの、その働きは{man}と同様に＜とりたて＞機能を持つと言える。

(4) 거기에는 여신상이 *있을* { 뿐/ *만}이고, 신관도 없고 아무도 없다.《そこには女神像がある<u>だけ</u>で、神官もおらず、何もない》
(5) 읽을 수 있는 것은 *한자* { 뿐/ 만}이었다. [由熙:52]《読めるのは知っている漢字<u>だけ</u>だった》

例(4)の {ppwun}は、述語連体形に接続した場合で、意味的には「女神像がある」と「神官などがない」とが対立されている。一方、例(5) のように「名詞＋ppwun＋ita」の構造では、{man}と意味変化なく置き換えられ、「漢字が読める」と「漢字以外が読めない」とが対立している。これによって、{man}と{ppwun}の両者の意味が類似していることが確認できる。このように{ppwun}に関して、先行研究では、構文的に先行要素の品詞によってその品詞論的なカテゴリーを分けているものの、意味的には両方とも＜とりたて＞の働きをするものである。

2.述語との承接

意味的に「だけ」と{man}、{ppwun}とは、「取り立てた要素以外に対比される要素を排除して、その唯一性を表す」という排他的限定を表す。構文的には、「だけ」と{man}、{ppwun}とは先行要素として、名詞句、述語句、文などの様々な異なる文の構成要素の後ろに現れうる。しかし、後行要素については、特に{ppwun}には、際だつ特徴が見られる。つまり、{ppwun}は、「だけ」、{man}とは異なって、その後ろに必ず判定詞{-ita}を伴う制限を持ち、文中には現れず、主に文末にしか現れない。ここでは、まず、これらの形態の構文的な特徴について、三つの形態が重なり合っている述語との承接関係を中心に見ていく。

2.1.「だけ」の述語との承接

まず、述語の活用形の後に「だけ」の接続する形を考察する。

(6) a. 本を読む<u>だけ</u>で、返事はしない。 [ル形]
b. きのうは雨が降った<u>だけ</u>だった。 [タ形]
c.*明日はきっと雪だろう<u>だけ</u>だ。 [推量形]
d.*早く起きろ<u>だけ</u>と言った。(起きろとだけ言った) [命令形]
e.*努力すれば<u>だけ</u>必ず報われるものだ。 [条件形]
f.*彼は本を読み<u>だけ</u>つづけた。(読みつづけただけだ) [連用形]
g. コンピュータを使って<u>だけ</u>、複雑な計算をする。 [テ形]
h. *昨日は、掃除をして<u>だけ</u>、洗濯をした。

上記の例を見ると「だけ」が述語の後に接続できるのは述語のル形、タ形、一部のテ形の場合に限られている。ル形・タ形への後接は、述語のみでも、述語にヴォイス・アスペクト・テンスなどの文法形式や「(引き) 出す」のような補助動詞がついた場合でも後接できる。また、前接

する述語の意味による制限はない。

2.2.{man}の述語との承接

韓国語の述語は「語幹」と「語尾」とで構成されるが、この他には、語幹と語尾の間に入って文のいろいろな文法的機能をする「接尾辞」がある。これら接尾辞は受身、使役、尊敬、テンス、アスペクトなどを表すが、これらが複数現れる場合には一定の順序によって結合する[8]。また、活用語尾には、「終結語尾、連結語尾、連体形語尾、名詞形語尾」[9]がある。

{man}が述語の活用形に接続できるのは、述語の連用形、述語の名詞形、一部の連結形で、述語の連体形、終結形に後接することはできない。

(7) a. 가만히 *보고만* 있어도 유희의 목소리가 들려오고,(中略) [由熙:52]《ただ見ているだけで、由熙の声が聞こえ、》
b. 손으로 *휘젓지만* 않았지 、(中略) [結婚:103]《*手でかき混ぜだけしなかったが、》
(8) 그때껏 과정으로서의 *삶만* 살아온 내게는 처음경험하는, (中略) [肖像 86]《*それまで過程としての生きだけ生きてきた私には初めて経験する、》
(9) 내 물음에는 대답하지 않고, 유희는 *웃기만* 했다.[由熙:39]《*私の問いに由熙は答えず、 笑いだけした》
(10) 일본인들은 회사가 사용하는 인터네트 서비스를 *통해서만* 정보를 접할 수밖에 없다.[日本2:118]《日本人は会社が使用しているインターネットサービスを通じてだけ情報に接するしかない》
(11) a.*철수가 학교에 *가다 만*《太郎が学校へ行くだけ》
b.*철수가 학교에 *갔을 만*이다. 《太郎が学校へ行っただけだ》

例(7a)は、動詞{po-ta(見る)}の連用形{-ko-}の後、例(7b)は、{hwicess-ta(かき混ぜる)}の連用形{-ci-}の後に{man}が後接した場合である。例(7a,b)の{po-ko-issta(見ている)}、{hwicess-ci-ahnta(かき混ぜない)}は、述語連用形にアスペクト形式と否定形式などの文法形式がついた場合であるが、{man}は、述語と文法形式との間に割り込むことができる。また、例(8)は、動詞と同族目的語で構成された表現で、動詞{sal-ta(生きる)}の名詞形語尾{-m}の後、例(9)は、動詞{wus-ta(笑う)}の名詞形語尾{-ki}の後、例(10)は、連結形{-a(e)se-(テ)}の後に後接している。しかし、例(11a,b)のように基本形{-ta}、過去連体形{-(ss)ul-}には後接できない。

以上のように{man}は終結形や連体形、また、並列節の連結形には後接できず、限られた従属節の連結形にしか後接できない。しかし、名詞としての働きを持つ名詞形と述語語幹につく、いわゆる副詞形語尾である{-ko-}、{-ci-}などの述語連用形に後接することは可能である。

2.3.{ppwun}の述語との承接

述語の活用形の後ろに{ppwun}が現れるのは基本形と連体形に限られ、{man}とは対立的な分布をなしている。しかし、一部の連結形に後接可能なのは{man}と同様である。また、必ず後ろ

に判定詞{-ita}を伴うという構文的な特徴を持っている。

(12) 다만 우선 순위에 철민이가 행운을 { *잡다/ 잡았다*} 뿐이죠. [結婚:29]《ただ優先順位を決めるときにチョルミンが好運を{つかむ／つかんだ}だけでしょう》
(13) a. 눈을 *감고 있을* 뿐이다 [鳥 269]《目をつぶっているだけだ》
b. 오랜 *친구일* 뿐이다[ムソ 135]《ただ友達であるだけだ》
(14) 그가 공부하는 것은 학교에 *가서* 뿐이다.《彼が勉強するのは学校へ行ってだけだ》
(15) a. *철수뿐이 쿄토에 간다。《太郎だけが京都へ行く》
b. *장농에서 이불을 꺼내기뿐 했다. 《*押入から布団を引き出しだけした》

例(12)の {ppwun}は、動詞現在形・過去形に接続している。また、(13a,b)は、それぞれアスペクト形式{-ko iss-ta(ている)}と判定詞{-ita}の連体形に後接した例である。例(14)は動詞{ka-ta(行く)}の連結形{-a(e)se-(て)}と承接した場合である。例(13)のように述語に文法形式がついている場合、その形式が連体形でありさえあれば、述語の持つ意味や文法形式による制限はない。しかし、(15a,b)のように格助詞の前や{-ita}以外の形態の前に{ppwun}は現れない。さらに、例(16)のテンス形式との関係において、後接する判定詞のテンスには制限がないが、前接する述語のテンス形式との制限がある。

(16) a. 나에게 그렇게 들려 { 올/ 왔을/* 오는/* 오던 / * 오겠을} 뿐이다.
《私にはそのように聞こえて{くる／きた／きている／きていた／*くる-未来} だけだ》
b. 나에게 그렇게 들려올 뿐 {이다/ 이었다/이겠지/ 이더라/이구나}.《私にはそのように聞こえてくるだけ {だ／だった／だろう／なんだなあ／なんだねえ}》

例(16a)で、述語{tullye-o-ta(聞こえてくる)}の現在連体形{-l-}、過去連体形{-essl-}のみに後接でき、未来を表す{-keyss-}の連体形には後接できない。これは{ppwun}が持っている意味的な特徴からの制限である。すなわち{ppwun}は、発話者の発話時にすでに成立した複数のコトガラやデキコトについて、ある一つのコトガラやデキコトを限定する排他的な働きを持っている。従って、まだ行われていない、或いは、現在、行われているコトガラやデキコトを限定することはできないと考えられる[10]。

3.対照—述語の取り立て

日韓両言語の文法体系を比べると、述語の活用形は韓国語の方が遙かに複雑であるが、その活用の語尾の多様性が韓国語の特徴といえる。つまり、両言語の述語の活用体系が必ずしも一対一の対応関係を持つものではない。つまり、一つの日本語のカテゴリーに対応する韓国語の形態が複数の場合も、また、複数の日本語のカテゴリーに対応する韓国語の形態が一つである場合もあ

りうる。従って、日本語の場合を基準としてそれと同様の働きをする韓国語という観点から、日韓語を対応させて考察を行う。本稿では日本語の述語の活用体系に沿って「だけ」を中心とし、それに対応する韓国語{man}、{ppwun}との構文的・意味的な相違について見ていくことにする。

3.1. 現在形・過去形との承接

述語の現在形ル形は、日本語の場合、文の終止機能と連体修飾機能をも同時にもっている。これに当たる韓国語の形態は基本形と連体形に分けられている。日本語の「だけ」がこの位置に現れるとき、「ナ形容詞」が「～ナ」という形になることからも、「だけ」が接続するル形が連体形であると見てもよさそうである。これについて、寺村(1991:149)は「だけ」の名詞的な性質がある証であるとする。一方、{man}は述語のル形、連体形の後ろには現れず、{man}は名詞的な性質を持っていないと規定される。述語の連体形{-l-}、基本形{-ta}の後ろに現れるのは{ppwun}のみである。

(17) a. 回転椅子が二つ*ある*だけの小部屋である。[氷 1:127]
　　 b *苦しい*だけなのよ。[雪:33]
　　 c. 失望するのが、*嫌な*だけだ。[森 1:97]
(18) a. あなたは自分のミスを*認められない*だけじゃないの。[検屍 293]
　　 b. 釜の蓋を少し*ずらせた*だけで、菊治はぼんやり坐っていた。[千:61]
(19) a. 무제한적이고 무차별적으로 *공급될* { 뿐/*만 }이었다. [アダム:159]《無制限的で無差別的に供給される*だけ*であった》
　　 b. 어머니가 아이에게 예쁜 옷을 *입게 했을* { 뿐/*만 }이다. 《お母さんが子供にかわいい服を着せた*だけ*だ。》

例(17)は、述語現在形、また、例(18)(19)は、a、b それぞれ動詞に受身や使役の形式がついた例であるが、述語に文法形式が後接した場合でもル形・タ形、連体形であれば、「だけ」と{ppwun}は後接できる。

3.2.連用形との承接

日本語の連用形[11]に対応する韓国語の述語語尾の形態は、名詞形{-ki}と連用形{-a(e)-}、{-ko-}の三つがある[12]。ここでは、前者を「連用形１―名詞形{-ki}」、後者を「連用形２―連用形{-a(e)-}」と呼び、二つに分けて考える。

3.2.1.連用形１―名詞形{-ki}

日本語の述語連用形に当たる韓国語の述語名詞形{-ki}は、構文的に名詞と同様の振る舞いをする。{man}は、名詞との後接に制限がないため、述語名詞形{-ki}との後接も可能である。

(20) *太郎は私の質問には答えず、笑いだけした。(笑っただけだ)
(21) a. 내 물음에는 대답하지 않고, 유희는 *웃기만 했다*. [由熙:39]《*私の問いには答えず、由熙は笑いだけした》
b. *유희는 *웃기* φ 했다. 《*由熙は笑いφした》
c. 유희는 *웃었다*. 《由熙は笑った》

例(21)は、述語{wus-ta(笑う)}の名詞形{-ki}に{man}が後接した例[13]で、「(由熙は私の質問に対して)笑うことはしたが、答えることはしなかった」という意味に取れる。

一般的なとりたて詞の構文的な特徴は、文構成上の必須要素でないため、文中にそれがなくても文が成立するが、(21)のように、「述語名詞形+man+hata」の構造を持つ文末の述語句を形成する{man}は、そのままでは文中で省略することはできない(例(21b))。これは、{man}が述語{wus-ta(笑う)}を取り立てるために語形変化した構造であり、実際に{man}を省略しようとすると、(21c)となる。従って、「述語名詞形+man+hata」構造での{man}は文を構成する要素としては任意的であると考えることができ、例(21)の{man}が取り立てている要素は、述語「笑う」で、「答える」と対比している。

一方、例(20)の文法的な文「太郎は答えず、笑っただけだ」も、(21)と同様の意味である。従って、<とりたて>の観点からは、「だけ」、{man}ともに取り立てる要素の範囲は同様であるといえる。

3.2.2.連用形2—連用形{-a(e)-}

韓国語の述語連用形には「述語の副詞形」と呼ばれる、{-a(e)-}、{-ke-}、{-ci-}、{-ko-}の4つの形態がある。そのうち、日本語の「脱ぎ捨てる」のような「連用形複合動詞」[14]の「脱ぎ」に当たる形態は、{-a(e)-}である。つまり、連用形{-a(e)-}は、動詞(前項)に別の動詞(後項)を付けて複合動詞を作る働きをする形態で、その後に{man}が後接することができる。

(22) *彼はいつも服を*脱ぎだけ捨て*て、かたづけはしない。(脱ぎ捨てるだけで、)
(23) a.그 회의에 참가한 일본인들이 계속 *얻어만 먹었구나*하는 생각이 들었다. [日本 2:358]
《*その会議に参加した日本人たちがずっともらいだけ食べたなあという想いが浮かんだ》
b. (中略) *얻어먹기만* 했구나하는 생각이 들었다. 《*もらい食べだけしたなあという想い》
c. (中略) *얻어 먹었을* 뿐이구나하는 생각이 들었다.《もらって食べただけだなあという想い》
(24) a.*철수는 계단을 *오르만 내렸다*.《*太郎は階段を上がりだけ下がった》
b. 철수는 계단을 *오르내리기만 했다*.《??太郎は階段を上がり下がりだけした》
c. 철수는 계단을 *오르내렸을* 뿐이다 .《太郎は階段を上がり下がりしただけだ》
(25) a.*할아버지가 *돌아 만 가셨다*.《*おじいさんが回りだけ行った》
b. 할아버지가 *돌아가시기만 했다*.《??おじいさんが亡くなりだけした》
c. 할아버지가 *돌아가셨을* 뿐이다. 《おじいさんが亡くなっただけだ》

(22)、(23a)のように、複合動詞の前項連用形に後接できるのは、{man}に限られる。(23a)は、前項連用形{et-e-(もらって)}と後項{mek-ta(食べる)}の間に現れる場合で、「誰かに御馳走されたことはあるが、自分が御馳走したことはない」（解釈１）と「日本人たちは、（誰から）もらって食べることはしたが、（自分が）買って食べることはしなかった」（解釈２）という二つの解釈ができる。「解釈１」は、構文的には前項連用形{-a(e)-}の後に{man}が現れているが、意味的に取り立てるのは{et-e mek-ta(御馳走される)}という複合動詞全体である。一方、「解釈２」は、「食べる」という行為を「（他人から）もらって」はしたが、「（自分が）買って」はしなかったという意味で、{man}が取り立てている要素の範囲は、複合動詞の中で後項{mek-ta(食べる)}を除いた部分である。

一方、(22)の「だけ」の自然な文「服を脱ぎ捨てるだけで、片づけはしなかった」は、「（服を）脱ぎ捨てる」と「（服を）片づける」とが対立する。つまり、「だけ」が取り立てる要素は複合動詞全体である。従って、＜とりたて＞の観点から、「だけ」と「解釈１」での{man}とは構文的な振る舞いこそ異なるが、意味的に取り立てる要素の範囲は複合動詞全体で、両者の意味的な働きは同様である。また、(23a)は、(23b,c)のように、「複合動詞名詞形＋man＋hata」、「複合動詞連体形＋ppwun＋ita」の構造に変えられるが、意味の変化は見られない。しかし、{man}が前項のみを取り立てている「解釈２」として働く場合は、{ppwun}や「だけ」と同様の意味的な解釈を誘発しない。

本来、複合動詞の後項は、依存的な形態として前項と分離することができない。しかし、(23)のように、{et-ta(もらう)}、{mek-ta(食べる)}という二つの自立形式として構成された「統語的合成動詞（syntactic compound）」[15]である{et-e-mek-ta(もらって食べる)}場合は、前項と後項とが分離され、その間に{man}が割り込むことができる。一方、(24)のように、動詞{olu-ta(上がる)}の拘束形式である語幹{olu-}と自立形式{nayli-ta(下がる)}とで構成されている「非統語的合成動詞（asyntactic compound）」と、(25)のように、前項{tol-ta(回る)}と後項{ka-ta(行く)}がそれぞれの持つ本来の意味を完全に失って{tol-a-ka-ta(亡くなる)}という別の意味となった「統語的合成動詞」の場合には、前項と後項とが分離できず、その間に{man}が割り込むことができない。

つまり、「統語的合成動詞」でも、(23)のように、後項が動詞としての性質を保持している場合は、前項に種々の動詞をとることができるのである。例えば、{mek-ta(食べる)}が後項として働く場合、{sas-e-mekta(買って食べる)}、{cip-e-mekta(取って食べる)}、{salm-a-mekta(ゆでて食べる)}のように、前項の制限が緩い。この場合は、{man}が後接している「前項 1」に対して、「前項 2、前項 3…前項 N」など様々な動詞の想定が可能になる。従って、「前項+man+後項」

の構造での{man}は、「前項」のみを取り立てて、「前項２、前項 3…前項 N」などと対比することができる。

一方、(25)のような、動詞としての意味を完全に失い、後項が接尾辞的な働きをしている「統語的合成動詞」の場合と(24)のような「非統語的合成動詞」の場合は、{man}が現れることはできないが、それは前項と後項の全体が一つの概念として固定されているからである[16]。従って、これらを取り立てる場合は、それぞれ「名詞形＋man＋hata」の構造（例(24b)、(25b)）や、「連体形＋ppwun＋ita」の構造（例(24c)、(25c)）として言語化される。

以上のように、「前項＋とりたて詞＋後項」という構造では、構文的に{man}は一部の複合動詞の前項の後と後項の後、「だけ」と{ppwun}は後項の後のみに現れる。一方、意味的に、{man}は複合動詞全体を取り立てることも前項のみを取り立てることもできるが、「だけ」と{ppwun}は複合動詞しか取り立てられない。

3.3.テ形

一般的に、動詞テ形は「テ形複合動詞」を作る場合と、従属節・並列節などの節を作る場合とがある。そのうち、「だけ」と{ppwun}が後接できるのは、テ形が従属節として働く場合に限られ、並列節や「テ形複合動詞」でのテ形には後接できない。しかし、{man}は、並列節でのテ形を除いて、「テ形複合動詞」と従属節の両方のテ形に後接できる。ここでは、「テ形複合動詞」と「テ形節」の二つに分けて考察を行う。

3.3.1.テ形複合動詞

(26) a.* 服を*着てだけみる*。(着てみる<u>だけ</u>だ)
b.* お菓子を*見てだけい*て、食べなかった。(見ている<u>だけ</u>で、)
(27) a.혜완은 힘겹게 입을 열어가고 있는 영선을 그저 무력하게 *바라보고만 있었다*.[ムソ 102]《*ヘワンは苦しく話しているヨンセンをただ無力に見て<u>だけ</u>いた》
b.(中略) *바라보고 있었을 뿐*이다.《(中略) 見ていた<u>だけ</u>だ》

「だけ」がテ形複合動詞を取り立てる場合は、後項の後ろに現れる。つまり、前項と後項の間に割り込むことはできない。一方、韓国語の場合は、前項の後ろと後項の後ろの両方現れるが、前者は{man}が後者は{ppwun}が対応する。例(27a)は、述語{palapo-ta(見る)}のテ形{-ko-}の後ろに{man}がついて「palapo-ko-man-iss-ta(見てだけいった)」の形で現れる。しかし、意味的には「見ているだけで、それ以外に、例えば、助けることはできなかった」などと考えられ、{man}が取り立てるのは前項のテ形{palapo-ko-(見て)}のみではない。また、(26)の自然な文での「だけ」

と(27b)での{ppwun}は前接要素の述語全体を取り立てている。従って、述語に補助形式がついた場合、<とりたて>の観点からは「だけ」と{man}、{ppwun}は同じ働きをしているといえる。

3.3.2.テ形節

形態的にテ形が従属節としての働きをする場合は、例(28)、(29)、(30)のように、テ形節[17]の後ろに「だけ」と{man}、{ppwun}が現れる。しかし、(31)、(32)のように並列節として働くテ形節、{-ko-(テ)}形節の後ろには現れない。

(28) コンピュータを*使って*だけ、複雑な計算をする
(29) 일본인들은 회사가 사용하는 인터네트 서비스를 *통해서*만 정보를 접할 수밖에 없다.[日本2:118]
《日本人は会社が使用しているインターネットサービスを通じてだけ情報に接するしかない》
(30) 그가 공부하는 것은 학교에 *가서* 뿐이다.《彼が勉強するのは学校へ行ってだけだ》
(31) a. * 太郎が歌詞を作ってだけ、花子が作曲をした。
b. * 電車に乗ってだけ、本を読んだ。
(32) 여름은 *덥고*{* 만/* 뿐}, 겨울은 춥다.《*夏は暑くてだけ、冬は寒い》

しかし、例(31b)のような「並列」の関係が明瞭でない同一主体のコトガラを表すテ形節は、一見、自然な文として捉えられうる。しかし、これは「電車に乗ってだけ」が主節「本を読む」に並列的に結びつく働きをする、並列節としての意味はなくなる。つまり、この文が自然となるのは、「電車に乗る」という条件の下では「本を読む」ということをするがそれ以外の条件では「本を読まない」という条件節の読みの場合に限られる。

以上のように、「だけ」と{man}、{ppwun}がテ形、{-a(e)se-(テ)}形を取り立てるのは条件節のような従属節[18]の場合であり、並列節を取り立てることはできない。

3.4. 文末の「だけだ」と{ppwun-ita}

とりたて詞の中で、文末に現れ、述語句を形成できるのは、「ばかり」、「だけ」のみである[19]。このように、「だけ」が判定詞「ダ」を伴って文末の述語句を形成するときには、前接要素が述語でも名詞でもよいが、{man}の場合は名詞に限定される。そして、述語に付くときにはその代わりに同じ意味をもつ{ppwun}が現れる。

(33) a. 辰子はちらりと村井を*眺めただけ*だった。[氷 2:92]
b. 分かったのは徹頭徹尾賛成致しますと云う*言葉だけ*だ。[坊:62]
c. 읽을 수 있는 것은 *한자* { 뿐/ 만}이었다.《読めるのは知っている漢字だけだった》
d. 철수가 교토에 갈 { 뿐/* 만}이다.《太郎が京都へ行くだけだ》

しかし、{man}は、上記の 2.2.で述べたように、「述語名詞形{-ki}+man+hata」の構造で、

述語句を形成することができる。形態的には、{-ita}と{hata}は異なるが、構文的な観点から見ると、両者は文を終止する働きをするものとして共通する。このことから、{man}も「だけ」と同様に文末に現れ、述語句を形成することができると考えられる。

文末の「だけだ」と「ppwun-ita(だけだ)」の構文的な違いは、判定詞の省略関係である。「だけ」と{ppwun}が文末に現れ、文を終結させるとき、日韓語ともにその後ろにそれぞれ判定詞「ダ」、{-ita}が接続した形をとる。しかし、一般的な文とは言いがたいものの、日韓語ともに判定詞「ダ」、{-ita}を省略して文を終わらせることは可能である。一方、複文の中で「～ダケダ」、{ppwun-ita}が前文に現れ、後文につなげる役割をしているとき、例(35)、(36)で分かるように、判定詞「ダ」、{-ita}は、「だけ」より{ppwun}の方が省略されやすい。

(34) 公衆衛生的な対策を優先することはありうるのか、と質問した<u>だけ</u>。[読売 1995.11.30]
(35) a. しかし葉子はちらっと刺すように島村を一目見た<u>だけ</u>で、ものも言わずに土間を通り過ぎた。[雪:54]
b.* (中略) 島村を一目見た<u>だけ</u>、ものも言わずに土間を通り過ぎた。
(36) a. 내 사랑 오직 조국<u>뿐</u>. 《私の愛はただ祖国だけ》[朝鮮日報 1995.]
b. 이따금 들려오는 술꾼들의 취한 소리<u>뿐</u>, 거리는 조용했다[肖像:154]《*時折聞こえてくる酔っ払いの声<u>だけ</u>、通りは静かだった》

以上のように、「だけ」や{man}とは異なり、{ppwun}の構文上の分布は判定詞{-ita}と共起するという制約を受け、文末の述語句を形成する。他に、一つの可能性として、判定詞{-ita}と共起して文末にしか現れないという制限から、{ppwun}と{-ita}を分けずに、{ppwun(-ita)}として<とりたて>機能を持つ一つの形態として捉えることもできよう。

以上、「だけ」と{man}、{ppwun}の述語との承接について「現在形・過去形との承接」、「連用形との承接」、「テ形との承接」、また、「文末の「だけだ」と{ppwun-ita}」、「文末での判定詞の省略有無」の五つの点にわけてその異同を考察した。以上のことを次の表で示す。

表　「だけ」と{man}、{ppwun}の述語との承接の対照（Tは、とりたて詞を指す）

述語との承接	だけ	man	ppwun
「文中」			
前項連用形＋T＋後項（「引き出す」類）	×	○	×
前項テ形＋T＋後項（「読んでいる」類）	×	○	×
述語テ形節（従属節）	○	○	○
条件形・命令形	×	×	×
「文末」			
述語句（ル・タ形）＋T＋ダ	○	×	○
名詞句＋T＋ダ	○	○	○
述語連用形＋T＋スル	×	○	×

上記の表で分かるように、「述語の取り立て」という観点から見ると、「だけ」に対応する韓国語は{man}よりも{ppwun}であるということが分かる。これは、{man}の構文的位置が「だけ」や{ppwun}とは異なるため、取り立てる要素の範囲が両者とは異なるからである。つまり、「前項連用形＋Ｔ＋後項」と「前項テ形＋Ｔ＋後項」の構造で、「だけ」と{ppwun}は複合動詞全体しか取り立てられないのに対して、{man}は、複合動詞を取り立てることも前項連用形・前項テ形のみを取り立てることもできる。一方、「述語連用形＋Ｔ＋スル」での{man}の働きは、「述語句＋Ｔ＋ダ」の構造での「だけ」、{ppwun}と同様であり、意味的に三者ともに述語を取り立てている。

これは、本稿では詳細には触れなかった名詞句との関係で、特に格助詞の前後に{ppwun}が現れにくいことと対立している。大ざっぱにいって、「だけ」に対応する韓国語は、「名詞（句）の取り立て」では{man}が、「述語の取り立て」では{man}、{ppwun}であると言えるであろう。

4.終わりに

＜とりたて＞の働きをする「だけ」に対応する韓国語は{man}と{ppwun}の二つの形態がある。意味的には、日韓両言語での三つの形態ともに「文中に現れている要素以外に対比される要素の存在が前提とされ、対比される要素を排除することによって、取り立てる要素のみを限定する排他的な限定」という意味を持つ点で、等価の形式であると言える。一方、構文的には、三つの形態の持つ制約が異なり、その対応にはズレが見られる。このような現象のうち、本稿では、三つの形態の構文的分布が重なりうる「述語の取り立て」に焦点を当てて分析した。

また、{ppwun}が述語に後接する場合、連体形としか後接できないということは、{ppwun}に名詞的な性質があると言えるだろう。

さらに、述語との関係から、本稿で取り上げられなかった課題として、モダリティ形式との関係がある。今まで、「だけ」は「ダロウ、マイ」などのいわゆる「真正モダリティ」形式は取り立てられないが、一部の「疑似モダリティ」形式は取り立てられるとされている[20]。しかし、実例からは「疑似モダリティ」形式を取り立てる例文は探しにくく、その確認作業はもちろん、韓国語の文法体系の中で、{man}とモダリティ形式との関係と両言語での対照をも含めて今後の課題として残したい。他、本稿では主に「だけ」と対応する韓国語という観点から{man}と{ppwun}との対照を分析したが、{man}と対応する日本語という観点からは、「ばかり」、「しか」、「さえ」をも含めた考察も必要となってくる。つまり、{man}から見た場合に対応する日本語は「だけ」

のみでないということで、{man}を中心とした対応する日本語の分析も必要となり、そこから{man}と「だけ」との異同が明確になると思われる。本稿ではこのような点にも触れられなかったが別の機会に論じたい。

「注」

1 韓国語の{man}はその特性の規定の仕方によって、様々な名称で呼ばれている（洪思満(1983:12)参照）1)towum-thossi(도움토씨）、補助助詞、補助詞、towum-kyes(도움겻)、2)限定助詞、限定詞、delimiters、3)通用助詞、通格助詞、不定格助詞、twulwu-tho(도움토)、4)後置詞、postposition、5)特殊助詞、別働助詞。本稿では、日韓語ともに＜とりたて＞機能をする形態素を「とりたて詞」と称する。

2 韓国語の文字に対するローマ字表記は、Martin(1967)の[Yale System]の表記法に従う。

3 ただし、例(2)は、文脈によっては別の意味に取れる場合もありうる。《》は、韓国語の直訳を示す。

4 用語及び定義は益岡・田窪(1992)に従う。

5 この定義づけに関しては、崔鉉培(1959:636)、蔡琬(1977:1)、高永根(1984:101)参照。

6 韓国語の文法用語では、名詞を修飾する形態のことを冠形詞、冠形形と呼ぶ。述語の冠形形とは日本語の文法で「述語の連体形」のことを指す。ちなみに、日本語と異なって、韓国語の述語は、終止形{-ta}と連体形{-(nu)n},{-(u)l}は異なった形態を持つ。本稿では日本語の文法用語に従い、述語の連体形、連体詞と呼ぶ。

7 {ppwun}の品詞論的なカテゴリーは、洪思満(1983,1990)、金勝坤(1989)、李源根(1996)などはとりたて詞のみとして、蔡琬(1995)などは不完全名詞として扱う。このように、{ppwun}の品詞論的カテゴリーの設定に複数の見方があるのは、同一の形態、意味を持ちながら異なる機能をすることによる。これは{ppwun}のカテゴリーが確定されていないことを物語っている。

8 韓国語の述語の接尾辞と語尾の順序に関しては、「語幹＋ヴォイス＋尊敬＋時制（過去・大過去）＋非文末ムード（将然判断）＋非文末ムード（体験）＋文末ムード・待遇法」の順である、と論じられている。野間(1997)参照。

9 「連結語尾」は、文と文とをつなぐ「連結形」と述語と述語とのつなぐ「連用形」の２つがある。本稿では、「語尾」という用語の代わりに「終結形、連結形、連用形、連体形、名詞形」と呼ぶ。

10 しかし、「영희를 오늘 만나지않고, 내일 만날 뿐이다. 《花子に今日会えず、明日会うだけだ》」のように、未来を表す時間副詞＜明日＞を取り立てることはできる。時間表現に関する＜とりたて＞については、「だけ」や{man}をも含めて、考察がさらに行われる必要であると思われるが、今後の課題として残したい。

11 いわゆる学校文法では、「読み」と「読んで」の二つの形が連用形とされているが、ここでは、「読み」を連用形、「読んで」をテ形と扱う。

12 韓国語の連用形{-ko-}、{-a(e)-}は、いずれも日本語の「読み」と「読んで」の両方に対応しており、日韓語の対応に関して詳細な分析が必要だと思われる。この点については別稿にゆずりたい。ここでは、一般的に扱われているように、韓国語の{-a(e)-}形を日本語の連用形と、{-ko-}形を日本語のテ形と対応させる。

13 動詞名詞形との関連で、「항공기에탑승하기만 하면 일단은 성공하는 것이었다. [女 2:279]《飛行機にさえ搭乗できれば、一応成功だった》」のような、条件節に現れる{man}に対応する日本語に「さえ」があるが、この条件節での{man}と「さえ」の対照は別の機会に述べたい。また、「그림만 그렸다(絵だけ描いた)、삶만 살았다 (生きだけ生きた)」など、「動詞名詞形{-m}＋man＋同属目的語」の構造での{man}にも日本語の「だけ」は対応しないが、お互いに対応の仕方が異なる表現についても別稿で述べたい。

14 益岡・田窪(1992:16-19)の用語。また、複合動詞及び「持って来る」のような「テ形複合動詞」に関する用語、定義もこれに従う。

15 韓国語の合成語については許雄(1979：88-133）参照。複合動詞については、日韓両言語の文法体系における対応関係も分析が必要であると思われる。

16 蔡琬(1977:11)では、述語と補助動詞との結合性が強くて慣用句のようになった場合、述語と補助動詞の間にとりたて詞を介入することはできないと指摘されている。

17 テ節に関しては、南(1993)、仁田(1995)等によって詳細な下位分類がされているが、「だけ」、{man}、{ppwun}が取り立てるのは、条件読みができる場合のテ節に限られる。
18 条件節におけるとりたて詞については沼田(1986b)、前田(1993)などを参照。
19 文体の面からは文語的な「のみ」もある。また、「まで」については研究者によって見方が異なる。
20 沼田(1992)参照。「だけ」のフォーカスとなりうる要素、つまり取り立てられる要素として当為判断の「べきだ」、確定判断の「かもしれない、「らしい」、「ようだ」、「はずだ」があるとする。

「参考文献」

柴谷方良(1983)『言語の構造—意味・統語編—』くろしお出版
寺村秀夫(1981)「ムードの形式と意味（３）—取り立て助詞について—」『文藝言語研究　言語篇』６　筑波大学文芸・言語学系
_____(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』　くろしお出版
沼田善子(1986a)「とりたて詞」『いわゆる日本語の助詞の研究』　凡人社
_____(1986b)「副詞句のとりたて—「と」「ば」「たら」「なら」と「も」—」『都大論究』２３号　東京都立大学国語国文学会編
_____(1992)「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上)』くろしお出版
野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
野間秀樹(1997)「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語との対照研究Ⅳ　日本語と朝鮮語』下　くろしお出版
前田直子(1993)「逆接条件文「～テモ」をめぐって」『日本語の条件表現』くろしお出版
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館
山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館　[復刻版 1970]
_____(1936)『日本語文法学概論』宝文館　[四版 1943]
高永根・南基心(1984)『標準国語文法論』塔出版社
金勝坤(1989)『韓国語の助詞の研究』建国大出版部
徐正洙(1990)『国語文法の研究Ⅰ』韓国文化社
_____(1994)『国語文法』뿌리깊은 나무
李源根(1996)『우리말도움토씨의 研究（韓国語特殊助詞の研究)』延世大国語国文学科博士論文
李翊燮・任洪彬(1983)『国語文法論』學研社
蔡　琬(1977)「韓国特殊助詞の研究」『国語研究』３９　国語研究会
_____(1995)「韓国語特殊助詞研究のある反省」『朝鮮学報』１５４　朝鮮学会
崔鉉培(1959)『우리말본』[復刊１７版、1994]　正音出版社
洪思満(1983)『国語特殊助詞論』学文社
許　雄(1979)『우리 옛말본』샘 문화사
Martin,Samuel.E.et al.(1967) A Korean-English Dictionary. New Haven:Yale University Press.

「例文出典」

・日本語原作：森 1,2（村上春樹作、「ノルウェイの森」上下、講談社）／砂（阿部公房作、「砂の女」、新潮文庫）／雪（川端康成作、「雪国」新潮文庫）／検屍（Particia D.Cornwell 作、「検死官」相原真理子訳、講談社)／千（川端康成作、「千羽鶴」、岩波文庫）／氷 1,2,（三浦綾子作、「氷点」上下、角川文庫）／坊（夏目漱石作、「坊ちゃん」、新潮文庫）
・韓国語原作：女 1, 2（金賢姫作、「이제 여자 이고 싶어요」上下、高麗院）／肖像(李文烈作、「젊은날의 초상」、民音社)／結婚(朴婉緒作、「서있는 여자」、作家精神／／由熙(李良枝作、「由熙」、삼진각)／日本 1, 2（田麗玉作、「일본은 없다」上下、知識工作所）／鳥(은희경作、「새의 선물」、문학동네)／ムソ(공지영作、「무소의 뿔처럼 혼자서 가라」、문예마당)／アダム(장정일作、「아담이 눈뜰 때」、미학사)